

## 編集後記

『大衆文化』第二十二号をお届けいたします。

本号は講演記録一本、論文五本、翻刻一本の掲載となりました。

二〇一九年六月七日に行われた佐野史郎氏の講演「戦争と乱歩」では、戦時における乱歩雌伏の日々と、「怪人二十面相」などの諸作品から醸し出される不屈の精神について、演者からの視点を込めて語っていただきました。何度も乱歩作品を演じたことのある佐野氏の発想は、乱歩研究にとっても興味深い切り口となっています。なお、『セクター通信』第十四号には、聴講していた学生の感想も掲載しております。併せてご覧下さい。

また投稿論文中、影山亮氏は「侍と探偵の蜜月」で、第二次世界大戦中や敗戦後における「捕物帳」の文壇的意義を、探偵小説との関係から論じています。金子明雄氏は「新派と歌舞伎のあいだ」で、明治三十六年から三十九年にかけて五代目中村芝翫が挑戦した新派劇について、家庭小説劇と歌舞伎俳優の資質との不釣り合いから考察を加えています。金田みか氏は「語る〈女〉と語られる〈女たち〉」で、侮蔑的とみられてきた永井荷風の女性観に対し、「つゆ

のあとさき」に登場する「娼婦」と「良妻」を軸として、自他の視点から考察し、疑義を呈しています。出口歩氏は「ハイジンの行方」で、温泉宿を語りの場とした意味や、お茶や煙草、囲碁という小道具に表象される登場人物の関係性など、江戸川乱歩「二癡人」に託された乱歩の試みについて記しています。横田遼氏は「旅立つ「兄」」で、乱歩「押絵と旅する男」の複雑化する舞台設定や登場人物、物事に対する認識などを丁寧に解きほぐし、それらが醸し出す幻想的な世界観を「語り」の観点から考察しています。

さらに松本陸杜氏は「経済学と心理学との関係を論ず。」で、乱歩が早稲田大学在学中、同人雑誌『白虹』に載せたPalgraveの『社会経済の辞典』の部分翻訳草稿を翻刻しています。大学時代の学問と乱歩の執筆活動との影響関係について、これまでほとんど論じられてきていませんが、「心理」研究という新たな視点を導入することができるのではないかとこの提言がなされています。

大衆が支持してきた演劇や時代小説、人気作家などを取り上げた、「大衆文化」らしい内容となっています。新型感染症の影響で落ち着かない昨今ですが、日常・非日常の徒然に、本書がお供できれば幸いです。